

# 光明寺だより

第114号  
浄土真宗本願寺派  
光明寺

〒793-0030 西条市大町550  
Tel 0897-53-4583



## 心に残る詩

峠 赤井政次 (79)

老いの坂には  
 多くの峠が連なります  
 還暦峠をスタートし  
 古希峠から  
 喜寿峠を越えてきた  
 目前には傘寿峠  
 はるかにかすむ米寿峠  
 さらに続く卒寿峠  
 その奥には白寿峠  
 気が遠くなる百寿峠  
 文化財的な茶寿峠  
 国宝級の皇寿峠と続く  
 どの峠まで元気で  
 たどりつけるかな

産経新聞「朝の詩」より



## 私たちのちかい

- 一、自分の殻からに閉じこもることなく  
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします  
微笑ほほえみかける仏さまのように
- 一、むさぼり いかり おろかさに流されず  
しなやかな心と振る舞いを心がけます  
心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけ大事にすることなく  
人と喜びや悲しみを分かち合います  
慈悲じひに満ちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき  
日々に精一杯せいいつぱいつとめます  
人々の救いに尽くす仏さまのように



「浄土真宗の宗風」に寄せて



本紙の一ページの下にいつも「浄土真宗の宗風」を掲載しています。改めてその文言を紹介しますと、

浄土真宗の宗風・現世祈禱や、まじないを行わず、占いなどの迷信にたよらない

浄土真宗では当たり前のことであります。一般社会での受け止め方は大きく違います。

例えば、作家の真継伸彦氏は『現代語訳親鸞全集』の中で次のように語っています。

「いづくにも散見する神社や寺院は、真宗寺院を除いてすべてが現世利益信仰の霊場である。家内安全、病気なおし、水子供

養、入試合格、交通安全等々。親鸞思想の

合理主義は、現実に現世利益信仰の迷信や呪術の否定にみられる。門徒たちの心も

迷信の禁忌の呪縛から解放されるのであって、わたしは、この合理主義の実現が、親

鸞思想およびそれを体してきた真宗教団の、日本人の精神上における最大の功績

であったとみなしている。今も大多数の日本人の精神が、ことあれば諸神諸霊諸仏菩薩に祈願したがる迷信の巢窟であることを顧みれば、この功績の絶大さが知られる」

ここで言う「親鸞思想の合理主義」とは「その教えが理屈にかなっている、まことにその通りだ」ということでしょう。

東西両本願寺、併せて二万カ寺の真宗寺院があります。日本国中どこへ行っても、真宗寺院で「お守り」や「お札」が売られてなければ、一切の加持・祈禱もしていません。

なぜなら、「ご利益を祈るといことは、結局は、自分の欲望を満たすために、仏を利用してしている事に他ならないからです。

「長生きさせて下さい南無阿弥陀仏」

「商売繁盛させて下さい南無阿弥陀仏」

「受験が受かりますように南無阿弥陀仏」

当人にすれば切実な問題かもしれませんが、これが神仏を祈っているのではなく、自分の欲望を祈っているのです。

厳しい見方かもしれませんが、ご利益を神仏に求めるのは、結局は自己中心のエゴなのです。

しかも残念なことにこうした人々の欲望をかなえてあげましょうという欲望迎合型宗教が実に多いのです。

真継伸彦氏が言われていますように浄土真宗以外は、すべてこうしたご利益を求める宗教と言っても過言ではないでしょう。

ここではつきり申し上げておきますが、神様や仏さまに私たちの虫のいい願いをかなえてくれる力などはありません。もし、そんな力があるのなら、世の中に病気で苦しむ人はいないはずですし、受験に失敗する人もいないはず。或いは景気が悪くなるということも起るはずがありません。少し冷静になって考えればすぐ分かることです。

そうは言っても、お寺や神社はご利益を頂くとおっしゃっている人がいる限り、この手の宗教はなくならないと思います。しかもこのようなことは今に始まったことではありません。すでに百年の昔、親鸞聖人が次のようなご和讃を作られて厳しく戒めています。

悲しきかなや道俗の

良時吉日選ばしめ

天神地祇をあがめつつ

ト占祭祀つとめとす (正像末和讃)

意識しますと、

「悲しいことに、今時の僧侶や民衆は何をするにも日の良しあしを気にしてみたり、また天の神、地の神を奉り、占いやまじないなどのかかり果てている」

この宗祖親鸞聖人の「ご精神が私たち浄土真宗の宗風として掲げられていますのです。さらに聖人は仰っています。

仏号むねと修すれど

現世を祈る行者をば

これも雑修となづけてぞ

千中無一ときらわゆるる

「意識」

お念仏を口にしながら、心の中で「利益を願う（現世を祈る）ような人は、全く阿彌陀さまのお心に沿うものではない。そういう人は一人として浄土に生まれることはない。

このように浄土真宗では、神仏に「ご利益を願う」ということは、欲望に根ざすものと

して厳しく戒めています。

親鸞聖人は「仏さまにこちらの願いを聞いてもらおうとするのではなく、私の方が仏さまの願いを聞いていくのですよ」と仰っています。「南無阿彌陀仏は、あなたの人生に何が起ろうとも私が護り通して上げます。だから私を心の支えにしてこの人生を精一杯歩みなさいという阿彌陀さまの呼び声です。その呼び声に込められた阿彌陀さまの願いを聞いていくのですよ」と仰るのです。これは、「ご利益宗教と呼ばれるものと全く逆の考え方です。

仏教では、「我が身に起きることは、他から与えられたものではなく、自分が作った因や縁によるものである。だから、それを引き受ける以外、自分の生きる場所はない」と説きます。つまり、いかなる事が起きても自らの責任においてそれを果たしていくというのが仏教の人生観です。ですから思い通りにならないからといって、神さまや仏さまに「こうして下さい」、「ああして下さい」と、お願いするのは筋が違うのです。

たしかにこの人生には色んなことがあります。人生の荒波にぶつかって砕けそうになることもあれば、余りの苦しさに、逃げ

出してしまいたいと思うこともあります。しかし、いくら苦しくても辛くても、我が身に起きることは自ら背負っていかねばならないのです。

これが、業報（自分のまいたタネは自分で刈り取っていく）の世界に生きる私たちの身の処し方です。

そんな世界に生きる私たちに向かって、「どんなことがあってもあなたを護り通してあげます。だから、精一杯この人生を歩んでいくのですよ」と呼んでくださるお方がいらっしやるのです。そのお方を阿彌陀如来と申し上げる仏さまなのです。

その阿彌陀さまの呼び声（南無阿彌陀仏）に込められた願いをはっきりと聞き届けていく時、私たちは自ら背負わねばならない荷物を背負って、この人生を歩んでいくことが出来るようになるのです。それは現世祈禱やまじないなどを全くする必要のない人生であります。



浄土真宗のしきたり

葬儀にまつわる風習や習慣というものは中々改まりません。その原因になっっているものに、「皆がやっとなるから、うちだけせんというのはどうもナー……」ということがあろうです。その代表的なものを挙げてみますと、

- 一・「清め塩」を使う
- 一・出棺時にお茶碗を割る
- 一・旅装束を着せる
- 一・膳飯に箸を立てる
- 一・魔よけの刀を置く

これらはすべて「死は穢れけが（不浄）である」「霊たまの祟りおそを畏れる」という誤った考えによるもので、仏教の教えとは全く関係のない俗信、迷信です。

浄土真宗の葬儀にはこうした風習や習慣はありません、と言うより、してはいけないことです。

浄土真宗のみ教えは「阿弥陀さまのご本願のおはたらきによって、生きて

いる今、救われ（これを平生業成へいぜいごうじょうと言います）、亡くなると同時に浄土に生まれ、仏さまに成らせて頂く」というものです。従って、葬儀はこの教えに即して行われるものですから、次のことをしっかりと頭に入れて、葬儀に臨んで下さい。

- 一・死は決して穢れけがではない（亡き人は尊い仏さまです）
- 一・亡き人は崇まらない（私たちを護り導いて下さる方です）
- 一・亡き人は迷ってはいない（迷っているのは私たちです）

長年続いた風習を改めることは何かと難しいことでしょうが、亡き方を穢れと考えるこのような風習は是非ともなくしたいものです。葬儀は深いご縁によって出会った方との、人生最後のお別れの儀式です。

故人の生前中のご苦勞を偲しのび、故人から頂いた数々のご恩に感謝することは当然のことですが、それと同時に、さまざままないのちによって生かされているこの

私はどう生きるかを考えさせて頂く尊い「ご縁」の場にしていくことが何よりも大事なことです。

身近な方の尊い死を通して「いのちの尊さ、人生無常のことわり」に目覚め「必ず救う、安心せよ」と呼んで下さる阿弥陀さまのお救いに預かることを自らの人生の支えにしていく、そこに浄土真宗の葬儀の意味があるのです。

先立っていく方は「かけがえのないのちを、精一杯輝かせてこの人生を送って下さい」と願っています。

そのためにも一刻も早くお念仏のみ教えに出会い、確かなよりどころに支えられた人生を歩むことが何より大事なことであります。

★今回のお話は以前にも本紙二十七号で採り上げたものです。

## 心に沁みるお話

聖路加病院の理事長であった日野原重明先生（1911〜2011）の著書『死をどう生きたか』の中に、あるの少女との別れの様子を書き綴った次のような一文があります。

・・・この少女の母親は熱心な仏教信者であり、娘の病気の治ることを願って、工場への行き帰りにお寺にお参りしていた。七月に入ると蒸し暑い炎天が続き彼女の容態はいよいよ悪くなった。日曜日ごとに母親は見舞いに来て、食事をとらない彼女を激励した。七月下旬のある日曜日の朝のことである。彼女の容態は早朝からひどく悪化し、嘔吐が続き、私が彼女の病棟に出かけた時、彼女は腸閉塞の症状を示し、血圧は下がり、個室の重症室に移された。彼女の苦しみを止めるにはモルヒネの注射しかなかった。私はいつもの二倍の量を注射して、彼女の苦しみが軽くなることを願いつつ、彼女の脈拍を数えていた。私は時々彼女の手を意識的に強く握り、「今日は日曜日だから、

お母さんが午後から来られるから頑張りなさい」と激励した。

少女は、私がモルヒネを注射するとまもなく、苦しみが少し軽くなったようで、大きな目を見開いて私にこう言った。

「先生どうも長い間お世話になりました。でも今日は、すっかりくたびれてしまいました」といって、しばらく間をおいたのち、またこうつぶけた。「私は、もうこれで死んでゆくような気がします。お母さんには会えないと思います」

そうして、そのあとしばらく眼を閉じていたが、また眼を開いてこういった。「先生、お母さんには心配かけ続けて、申し訳なく思っていますので、先生からお母さんに、よろしく伝えてください」。彼女は私にこう頼み、私に向かって合掌した。死を受容したこの少女に対して、どう答えていいかわからず、「安心して死んでゆきなさい」などとはとてもいえず、「あなたの病気はまたよくなるのですよ。死んでゆくなんてことはないから元氣を出しなさい」といった。そのとたん彼女の血色が急に変わった、大きな声で看護婦さんを呼び血圧を測ろうとしたが、

血圧はひどく下がり血管音はもう聞けなかった。私は彼女の耳元に口を寄せて大きく叫んだ「しっかりしなさい。死ぬなんてことはない。」彼女は急に気づいて二つ三つ大きく息をしてから無呼吸になった。こうして彼女は永遠の眠りに入った。これは私にとって死との対決の最初の経験であった。

私は今になって思う。なぜ私は、「安心して成仏しなさい」といわなかったのか？「お母さんには、あなたの気持ちを充分に伝えてあげますよ」となぜいえなかったのか？そして私は脈をみるよりも、どうしてもっと彼女の手を握ってあげなかったのか？

それからは、受け持ちのの患者が重い場合には日曜日でも必ず出かけて患者を診ることが習慣化した。死を受容することはむづかしいという。しかし十六歳の少女が、死を受容し、私に美しい言葉で訣別したその事実を、私はあとからくる若い医師に伝えたい。

趣味の広場



俳句を楽しむ (九十三)

森本隆を

猛暑を何とか耐え、祭りの前後の数日だけ秋を感じましたが早くも朝夕の冷え込みはもう冬ですね。前住様からこの年末号の原稿を書くように言われた日はすでに二十四節気で言うところの「小雪」の日でした。今年「光明寺だより」二月号から、暦の上でいうところの二十四節気をテーマに、日本人がいかに季節や日々の生活の中での季節感に敏感に生きてきたかを俳句とともに見てきました。今回は最後の回で、冬の節気を見る回ですが、もう既に「立冬」と「小雪」は過ぎてしまいました。立冬は今年十一月八日、小雪は十一月二十二日でした。立冬はこの頃になると日の暮れが早くなり冬らしい季節風が吹き始め、季節の変わり目を感じさせられるところです。小雪は立冬の十五日後で、北国の方から雪の便りが聞こえてくるころですね。

立冬のことに草木のかがやける 沢木欣一  
立冬や有るべき明日を疑わず 滝沢 幸助  
立冬の太陽の位置確かむる 星野 高士  
三句ともいよいよ厳しい冬を迎えるかという季節の境目をはっきりと感じ、気持ちを引き締め

ていることしを素直に詠んでいます。

小雪といふ野のかげり田の光 市村究一郎  
小雪や声ほそほと鳥過ぐる 鍵和田釉子  
「小雪」という名に「雪」の字がありますが、南国では陰暦十月の頃では、北国ほどまだ冬らしくなく、この二句とも気持ちはまだ冬近いころの秋を惜しむくらいのおだやかさが感じられます。

さて、あとはいよいよ冬そのものの「大雪」、「冬至」、「小寒」、「大寒」の四つの節季が残ります。  
大雪や暦に記す覚え書き 椎橋 清翠

大雪は陰暦の十一月の節になります。一年の、その日その日を暦で確かめながらの毎日です。

山国の虚空日わたる冬至かな 飯田 蛇笏  
風雪の少しく遊ぶ冬至かな 飯田 波郷  
切株の椿円冬至の日のわたる 神蔵 器

「冬至は陽暦十二月二十二日頃にあたり、一年中の昼間の最も短い日です。いくら南国でも、寒気はこのころから厳しくなり、人間も体を大切に思う季節です。だからこの冬至の日にはカボチャを食べるだとか風呂に柚子を浮かべてゆつくり湯に浸るとかの風習があります。大気も澄み切って自然の景がおおらかに詠まれた三句でした。

年が明け、「小寒」と「大雪」の二つの節季を迎えついに二十四節気は終りを迎えます。

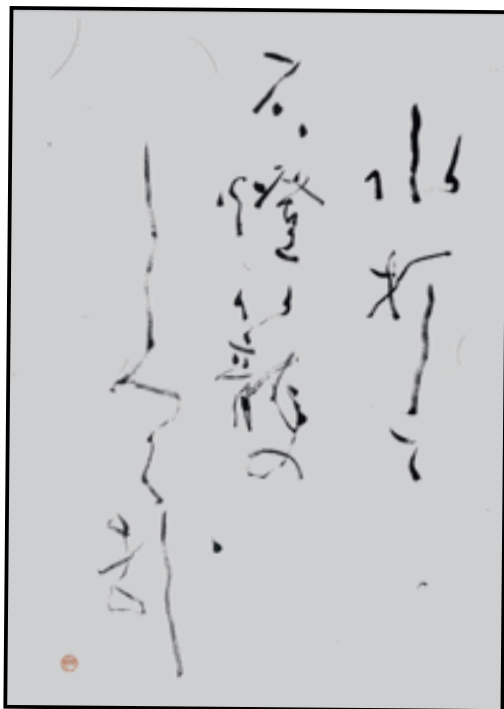
風波たち来る小寒の入海も 茨木和生  
大寒のここは何にも置かぬ部屋 桂 信子

大寒の一戸もかくれなき故郷 飯田 龍太  
大寒の橋を渡れば明日なり 前田吐実男  
一句め、「小寒」は寒の入りとも言われてこのあと大寒へと続き寒さの最も厳しい時期となります。「大寒」は陽暦一月二十日頃で、武術や芸事も寒稽古といって鍛錬をおおいに励む時期ですね。ここに引用した小寒、大寒の四句とも大自然の厳しさと澄明な空気の感じをうまく五七五の十七音にまとめています。

皆さんにおかれても冬に元気なウイルスに十分気を付けて年末年始の何かと気忙しい時期を健やかに過ごして下さい。冬の寒さが人間の身体には一番こたえるそうです。あたたかく、おだやかな毎日を。今年も一年、有難うございました。



# 位職書作品



字句一水打て 石燈籠の しづく哉

## 『死をどう生きたか』

私の心に残る人々



BOOK 本

発行所 中公新書  
著者 日野原重明  
定価 560円 + 税

著者は元聖路加病院の理事長をされていた日野原重明氏です。四十五年余りの内科医の主治医としてお世話をして逝くなった患者さんは六百人を数えるそうです。その中で人間の生き方を教えられ、いのちの尊厳を印象づけられた十八名の人々、著者の両親、医師の道を教えてくれたオスラー博士、聖路加病院の創設者トイスラー院長を加えて、その生の終焉の実相を書き綴り、一冊の本として出版されたものです。

医学、看護に携わる人々、また、これからこの道に進む若い人々、そして、病む人々やその家族にこの真実の記録を捧げたいと思う、と書き記しています。

令和6年度年忌早見表

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



該当のお家には年忌通知表をお配りして  
いますが、念のため早見表を参考にご自  
宅の過去帳でご確認ください。



言葉のプレゼント

自分のことより  
ちよつと他人のことを考える  
こんな事が出来る人を  
心豊かな人という

雪山隆弘

★次回発行予定…2月下旬

「光明寺だより」をご家族の皆さんで  
お読みください



回忌	死亡の年号
1周忌	令和 5年
3回忌	令和 4年
7回忌	平成30年
13回忌	平成24年
17回忌	平成20年
25回忌	平成12年
33回忌	平成 4年
50回忌	昭和50年
66回忌	昭和34年
100回忌	大正14年
150回忌	明治 8年
200回忌	文政 8年
250回忌	安永 4年
300回忌	享保 10年



★コロナウイルスに加えインフルエ  
ンザが流行しております。先日インフ  
ルエンザのワクチン接種をしました。  
手洗いがいを励行しましょう。  
★本年も残り少なくなってきました。  
年齢と共に一年の過ぎるのがまこと  
に早く感じます。ウオーキングの方は  
健康を兼ねてほぼ毎日続けています。  
★住職の長男（光）が幼稚園の運動  
会で一位になりました。元気に育っ  
てくれることを願うばかりです。

